

Action for Butterflies

チョウの舞う豊かな自然を将来へ



ヒメチャマダラセセリの 生息環境改善のため、 ハイマツの除去を 実施しました

「ツの人為的な除去ですが、当地は、高山植物群落が国の特」
(20号で訂正済)

日本では、北海道のアポイ岳周辺にのみ生息するヒメチャマダラセセリ。ニュースレター 14号 (20-21ページ) で紹介しましたが、生息地である高山植物群落がハイマツ林の拡大によって変化し、ヒメチャマダラセセリは、アポイ岳固有の様々な植物とともに減少しています。

そのため、当協会では2011年より、ヒメチャマダラセセリの生息状況の詳細な調査を実施するとともに、前回のニュースレターでの報告以降、保全のための具体的な対策を提案し、実施にむけた活動を進めてきました。

ハイマツやゴヨウマツの拡大によって、1960年頃と比較して、高山草原はすでに半分以下の面積となっており、このままの速度で拡大が進行すると、あと15年程度で高山草原の大部分が失われることが予測されたことから、早急な保全対策が必要です。とりわけ、保全上重要なことは、ハイマ

別天然記念物に指定されているほか、国定公園の特別保護地区や特別地域であるなど、環境の改変が規制されている区域です。そのため、文化庁、北海道関係部局、様似町、地元のアポイ岳ファンクラブ、北海道希少野生動植物保護対策検討委員会植物専門部会の委員である植物専門家等との協議を重ね、2013年5月に試験的な除去を実施することができました。

具体的には、2012年11月に、試験区域の設定および試験区域内の植物の調査を実施しました。ハイマツ除去試験区は、20m×10m、10m×10mの2ヵ所とし、ハイマツの本数はそれぞれ150本、50本程度(※個体識別は難しいため、主幹の本数で計数)でした。そして2013年5月21～22日に、アポイ岳ファンクラブのメンバーおよび様似町の行政関係者を中心に、2日間をかけてハイマツの除去を行いました。作業はノコギリを利用して、生えているハイマツ、ミヤマハンノキ、ヒロハヘビノボラズなどの低木類を伐採するとともに落葉層の除去を行うもので、手間のかかる重労働となりましたが、当初の目標通り終了することができました。

その後、除去試験区で7月にヒメチャマダラセセリの幼虫調査を実施したところ、20個体程度を確認できましたが、除去を実施した時期がヒメチャマダラセセリの発生時期の直前であったため、食草であるキンロバイの回復が追いつかず、全体的には産卵が難しかったと思われました。食草のキンロバイは良好な状況となっており、今年はヒメチャマダラセセリが数多く確認されることが期待されます。また、植生の調査でも、試験区で高山草原の構成種が多数出現しています。

今年の3月には、様似町主催の報告会も実施され、アポイ岳の自然環境を保全するための今後の取り組みに向けた



2012年11月に実施した試験区の調査
木本植物の樹種および樹高・根元直径を計測した

ハイマツ除去作業のようす(2013年5月)
15名ほどで2日間にわたり実施した



ハイマツ除去試験区(20m×10mのエリア)



作業後の様子。ピンクのテープは食草のキンロバイ

議論も活発になってきています。当協会では、ヒメチャマダラセセリの調査を継続し、植物専門家の調査結果と合わせて今回の成果をまとめ、それらに基づく関係者の合意によって、アポイ岳における高山草原の回復とヒメチャマダラセセリの保全に取り組んでいく予定です。

最後に、様似町およびアポイ岳ファンクラブのみなさんには、ハイマツの除去に多大なご協力をいただきました。また、植物調査を担当された佐藤謙(北海学園大学教授)、丹羽真一(さっぽろ自然調査館)の両氏、ヒメチャマダラセセリの調査に協力いただいた渡辺康之氏、ならびに許可等に携わられた文化庁および北海道の関係部局の皆様ほか、ご参加・ご協力をいただきました皆様に、厚くお礼を申し上げます。

ハイマツ除去試験区の7月の様子



試験区内の剪定した食草キンロバイ
(2013年7月)
ヒメチャマダラセセリの産卵習性および植生回復の観点から食草のキンロバイも剪定したが、その後、すべての株が展葉していた

